記者ノート

受難！琵琶湖のカワウ

アユ減り"加害者"扱い　生態つかまぬ駆除疑問

大津支局　添田孝史

琵琶湖とその周辺でいま、水鳥のカワウが、フナなどの淡水魚を食い荒らすブラックバスと並んで、悪者にされている。滋賀県はこの夏、「川に放流したアユを食べる」「エリ（定置網）から魚をかっさらう」などを理由に、約千羽を散弾銃で撃ち落とすことを許可した。ところが、よくよく取材すると、被害の実態も、カワウの生態も、ほとんど知られないままの駆除とわかった。カワウはなんにもいわないけれど、野生の生物と人間の関係を考えさせられる出来事だった。

アユ釣りの名所、琵琶湖西部の安曇川では今年、解禁日になってもアユが釣れなかった。カワウが食い尽くしたから、という。琵琶湖独特のエリの上に、何百羽ものカワウがたむろしている光景にも出あう。約二千羽の巣がある竹生島では、フン害で、樹林一・四㌶が茶色に変わった。木が枯れ、山肌が崩落する恐れも出ている。ここ二、三年、カワウは琵琶湖一帯で急増しているらしい。

しかし、滋賀県自然保護課で取材したら、こんな具合だった。

琵琶湖全体でどのくらいカワウがいるんですか。

「現在調査中です」

どのくらいの水産被害があるんですか。

「水の中の話ですから、被害が何トン、というふうにはっきりは出ません」

被害がはっきりしないのに、どうやって撃ち落とす羽数を決めるんですか。

「……」

琵琶湖の野鳥の生態にくわしい山崎亨さんは「感情的にカワウを守れ、というのではない。確かにアユに被害も出ていると思う。しかし、殺す前にもっと科学的な調査をすべきだ。どんな魚を、どのくらい食べているのか、ねぐらの位置や行動範囲、どのくらい生息しているか。そんなことさえ、わかっていない」と話す。

東京都で一九九〇年、多摩川水系の漁協が「カワウの食害で、魚が釣れなくなり、遊漁料収入が減った」として、都に駆除を求めたことがある。都は実態を調べ、鳥や魚の研究者や漁協、動物保護団体の代表ら十二人が一年半もかけて討議した。今年一月、「現時点では被害の認定が出来ない」との結論を出して、駆除を見送った。

静岡県の浜名湖では、八九年に、ウナギを食べるからと、二百三十羽のカワウが駆除された。うち三十四羽が解剖されたが、胃の中から出てきたのは、ボラやコノシロなどほかの魚ばかり。ウナギは一匹も出てこなかったそうだ。

琵琶湖のカワウは、容疑が固まらないうちに殺された。「せめて、殺した後に、大きさや年齢の計測、胃の内容物を調べてほしかった。それが今後、駆除する量を決める資料になる」と研究者。事前調査をもとに駆除をまぬがれた東京に比べて、琵琶湖のカワウは気の毒な気がする。

駆除を認めたのち、滋賀県も琵琶湖のカワウの基礎調査を始めた。そこで、意外な結果が出た。

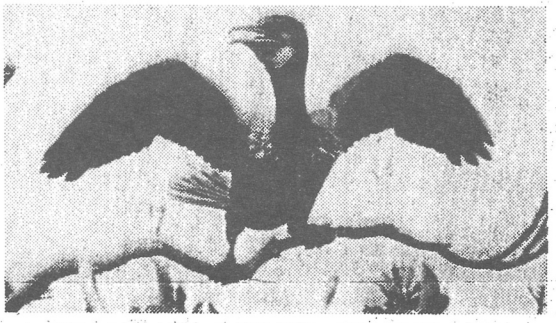
どんなものを食べているのか、吐き戻す内容を調べたところ、ブラックバスやハスがほとんどで、被害にあったとされるアユはあまり出てこなかったのだ。調査を担当した日本鳥学会会員の須川恒さんは「八〇年代のブラックバスの増加と、カワウの増加に、関係があるのかも知れない」と話す。山崎さんは「カワウが増えたのは、ブラックバスが増え過ぎたのを抑える自然の摂理だろう」と推測している。

滋賀県は、琵琶湖の生態系に悪影響があるとして、ブラックバスの駆除に力を入れ、八四年から一キロ二百円で買い上げている。

カワウは一日平均三百五十㌘前後の魚を食べるという。その半分がブラックバスとして計算すると、カワウ一羽が駆除する量は、年間約一万三千円分。琵琶湖すれば、総計約四千万円分のブラックバスを食べていることになる。これは、同県のブラックバス対策費の約三千万円を上回る。琵琶湖の「悪役」退治に、カワウは少なからぬ役割を果たしているのだ。

カワウの生態を観察しているカワウ標識調査グループ代表世話人の福田道雄さんによると、七〇年代前半には、全国で数千羽しかいない貴重な野生生物だったが、現在は二万から三万羽生息している。「フナやコイの過剰放流などでエサになる雑魚が増えたことが原因」とみる。国内最大の繁殖地、愛知県知多半島での増加が著しく、琵琶湖や山陰地方にも、そこから流入しているらしい。

こんなデータを知ると、今回の滋賀県の対応に、疑問を持たざるをえない。たしかに、アユ漁で生計を立てている人たちの気持ちを考えれば、駆除が必要な場合もあるだろう。しかし、その前に実態を調べるのは、当たり前のことだ。取材を通じて、自然の摂理に敬意を払うことの大切さを考えさせられた。



ペリカン目ウ科。体長約80㌢。翼を広げると1㍍以上ある。全身が黒く、くちばしの根元は黄色で、ほおは白い。水辺に近い林の樹上に巣をつくって、一夫一妻で子を育てる。主に魚類を食べる＝琵琶湖の竹生島で